

## 【日高囃と春子刀自<sup>とじ</sup>※】



桜の花が咲き誇り、心地よい季節となりました。まもなく奥州水沢の祭りを代表する日高火防祭が開催されますが、今回ご紹介する“イッピン”は火防祭にちなんだ「日高囃と春子刀自」の写真です。吉小路組のはやし屋台と一緒に微笑む春子刀自のお姿は、昭和45（1970）年4月22日に現在の旧宅門前にて撮影されたものです。吉小路組の皆さんの春子刀自へのお気持ちが伝わってきます。

毎年4月最終土曜日に開催される日高火防祭は、藩制時代からの伝統を生かし300余年の歴史があります。由来としてあげられるものに明暦3（1657）年の江戸の大火とかかわりをもつものがあります。三代目水沢城主の留守宗景<sup>むねかげ</sup>は、伊達公の命を受け江戸に在り、10余万人もの犠牲者が出た俗に言う振袖火事<sup>ふりそで</sup>の悲惨な災禍を目のあたりにしています。その後、幕府は全国に「火防令」を出していますが、任を終えて帰水した宗景は肝に銘じて城下における火警を説き、防火の方法、罹災後の救済などの対策を講じます。さらに、不慮の災害を神仏の加護によって未然に防止しようと、産土神日高妙見社<sup>うぶすなのかみ</sup>の日（火）と祖霊社<sup>みずやま</sup>瑞山神社の瑞（水）に通ずる両社へ祈願する祭事をはじめたとされています。

それから、火事にまつわる實の逸話として次のような話があります。胆沢県庁給仕に採用された明治3（1870）年10月4日の晩、實（数えて13歳）は県庁が火事に見舞われたときすぐに駆けつけ、夜は明かりがないと身動きが取れないほど暗い庁内の要所要所に蠟燭を灯して歩きました。その間に追々と人が駆けつけ、重要書類や諸調度を外部へ運び出すことができ、事なきを得ました。武田敬孝<sup>ゆきたか</sup>権知事から感状に添えて金一封の褒章が授与され、その沈着ぶりが多くの人から賞賛されました。

また、令和3（2021）年に国登録有形文化財（建造物）となった斎藤子爵水沢文庫は、東京にあった自らの蔵書を郷土の子弟に閲覧させる目的で昭和7（1932）年實が建てたもので、耐火式の鉄骨で建築されており、重厚な鉄の扉を閉めると火がまわらない造りとなっています。こうした工夫から實の防火に対する意識が伝わってきます。

### 《奥州市消防記念館》

※年輩の女性を敬愛の気持ちを込めて呼ぶ称。

日高神社境内北側にある「奥州市消防記念館」には、火災や消防の歴史を物語る記録や関係機器が残されています。館内には、大正2（1913）年實が朝鮮総督就任を記念して寄贈した蒸気ポンプや、大正13（1924）年時価12,750円で購入した自動車ポンプ「ベンツ」等も展示されています。

日高火防祭当日（26日）は、10時00分～15時00分の間無料公開されます。